

日江井榮二郎氏ロングインタビュー

第10回：東京天文台の改組



高橋 慶太郎

〈熊本大学大学院先端科学研究院 〒860-8555 熊本県熊本市中央区黒髪 2-39-1〉
e-mail: keitaro@kumamoto-u.ac.jp

日江井榮二郎氏のインタビューの第10回です。1988年に東京天文台は東京大学から独立して国立天文台へと改組しました。天文台改組については、これまで本シリーズで様々な人に伺ってきましたが、日江井氏独自の視点から語っていただきます。改組に伴ってどのような天文台を作っていくかということを議論していく中で、日江井氏は、大学から離れることで学生とのつながりが薄れることや、観測装置を支える技官の重要性が大学側に理解されにくい点を懸念したと述懐します。また、従来の東京天文台が「閉鎖的」「密室」などと評されることに対し、日江井氏は東京天文台固有の背景に触れ、異なる見方を提示します。最後に、本インタビューのようなオーラルヒストリーは歴史史料として価値がある一方で、人によって見方・考え方の違いがあり誤解なども含むため、慎重に扱うべき史料であると注意を促します。

●天文台改組

高橋：では今回は天文台の改組のお話をお願いしたいのですが、1988年に東京天文台が東京大学を出て国立天文台に改組したことですね。改組については古在（由秀）さんとか小平（桂一）さん、海部（宣男）さんなどからも聞いておりますが、日江井先生の視点からお話をしていただければと思います。

日江井：改組っていうのは大変だよね。エネルギーを食うよね。だって誰だって自分が今までやってきた慣習を変えるということは難しいわけだよ。それに組織全体のコンセンサスを得なければいけない。それはずいぶん大変なわけ。

高橋：そうですよね、特に大きな組織ほど大変でしょうね。

日江井：改組のときの台長は古在さんですね。改組で一番がんばったのは内田豊さんです。内田豊

さんがみんなをリードして、どう改組するか検討していったんです。天文台をどういうふうに変えるか、出ていくときには東京大学には何を残すか。もうその頃はですね、教授会で侃侃諤諤やつてね。教授会が終わってからも内田くんと部屋でしゃべって、それでも終わらなくてですね。もう夜にも内田君からしおちゅう電話かかってきた。夜の11時くらいまで話してさ、そうやってどうしようこうしようと。

その改組のとき、大きな大型望遠鏡が欲しいというものが天文の仲間の間で出ていたんですね。

高橋：後のすばる望遠鏡（1999年完成、当時はJNLT: Japan National Large Telescopeと呼ばれていた）ですね。

日江井：当時はいろんなグループがあって、国内に作るんだ、国外に作るんだ、口径何メーターだっていろいろ議論をしてたんですね。それで最終的にはハワイに作るとなって、建設費が400億

円かな。ところが当時、東大にはいろんな研究所があったわけですが、1つの研究所に400億も出せないよと、年間の予算はせいぜい1億に近い数千万円という部局が多いよと、そういうことを聞かされていました。それが本当かどうか私にはよくわかりませんでしたが、ああ東京大学を出なきやいけないのかなあという雰囲気になってました。実際どういう議論が東京大学で行われたかわからない。でもとにかく東京大学から出ないとその400億が付かないよと聞かされていたんです。当時は森亘総長だったんですが、総長自身は天文台を外に出したくなかったというような話も聞いておりますね。宇宙科学研究所が先に東京大学から出て、それと同じように東京天文台も出ようという雰囲気だったのではないかですか。

高橋：予算規模から言って、東大を出なきやいけない雰囲気だったわけですね。

日江井：そうですね。それでちょうどその頃に第二次臨時行政調査会というのがあって、国の人いろんな機関をくっつけたりなんかして組織改編がありました。その中で水沢緯度観測所も俎上に上がったね、当時の坪川（家恒）所長がいろいろ苦労してあちらと一緒になろうかこちらと一緒になろうかと考えたんです。文部省にしたって緯度観測所は自分の直轄ですからね、自分の研究所がなくなるとそこに人が送れなくなりますから、役人としても痛いですよね。だからまあなるべくなら残したかったわけでしょう。そのときに、文部省の人がちらっと水沢の緯度観測所と一緒にになる気はないかと言った、と聞いていました。これも本当かどうかわかりません。私は直接聞いてない。

高橋：噂で聞いたわけですね。古在さんや小平さんが文部省の人からそのようなことを言われたっていうお話を聞いています（古在由秀氏インタビュー第5回、小平桂一氏インタビュー第7回参考）。

日江井：それでまあ文部省もそういう意向だということで、じゃあ一緒になろうと。まあ結局は緯

度観測所だけじゃなくて名古屋の空電研究所からも人が移りました。天文台としてはポジションが増えるのはありがたいことだからね。まあ教授会としてもそれはいいことだろうという雰囲気でした。ところが組織の格としてはね、東京天文台より水沢の緯度観測所の方が上なわけですよ。天文台の方が下なんです。だけども当時はその辺のことがよくわからなくてね、水沢の緯度観測所が東京天文台に合併するという格好になっちゃったわけね。

高橋：東京天文台は東大の中の研究所で、緯度観測所は文部省直轄の研究所なわけですよね。

日江井：水沢と天文台と何が違うかというと、向こうは研究職、僕らは教育職なわけですよ。教育職というのは大学と関係があってね、学生という若い血を入れることができる。研究職というのは与えられた研究をやる。水沢は木村栄先生のZ項でね、地球のみそり運動は何が原因かというのを調べるのが大きな目的でした。私と一緒だった若生（康二郎）君とかがそれを調べてね、当時ほどんど問題は解決してたんです。

高橋：Z項が出る物理的な要因がだいたい理解されたということですね。

日江井：だけど水沢としては坪川式重力計だとか、地球物理的な研究も進めてたわけですよ。それで研究職っていうのは教授・助教授じゃなくて部長・課長システムなんです。天文台よりも待遇がいいのね、やっぱりね。だから格が上だなあと思ったですね。古在さんが喜んで話してくれたのは、水沢というのは所長の職がある。つまり東京天文台ではですね、台長というのは教授の中から選ばれてなるというポジションなんだけど、水沢と一緒にすることによって、天文台長という職が教授とは別にできたんです。ポジションが1つ増えた。だから天文台としてもそれはいいことだと思ったんです。一方で水沢では部長が教授になり、課長が助教授になりましたが、みんながそうなったのかどうか、選に漏れるような人がいな

かったわけではないと思います。だから苦労した人もいたのではないかしらと思いますね。

高橋: 先生は個人的には水沢とは何かお付き合いがあったんですか？

日江井: 一緒に研究したことはありません。だけど同期の連中や後輩が行ってたりして、よく知ってる人がいましたけどもね。だから行けばおーいって。

それで私はね、水沢がこういう臨調に引っかかったのは、大学と一緒にならなかったからではないかしらと思ってたんです。あそこだったら東北大学だとか北大だとかね、一緒になってできただんじゃないか。若い学生が来てくれるどね、彼らは思わぬこと、面白いことを言うわけよね。それで自分自身も考えて、ああそうかと、それが新しいサイエンスにつながるんですね。実は研究者にとって、教育というのは若い人から新鮮な考え方を得るチャンスなわけですよ。

高橋: Z項の研究が一段落して、その次の新しいサイエンスをっていうことですね。

日江井: その後、森本（雅樹）君だとか海部君ががんばってVLBI（超長基線電波干渉法）が始まりましたけどね、それまではとにかく地球のみそすり運動をやっててさ。やっぱり学生との付き合いがないと、なんていうの、それまで思いもしなかった研究を始めるのは難しいよね。研究には若い連中が必要だと思うな。

だから私はですね、天文台が大学から出ることに心配していました。水沢のようなことがあるからね、やっぱり学生というのが必要だから、天文台も東大から離れるにせよ、学生が来るようなシステムであってほしいと思った。それで、三鷹に東京大学の天文学教育研究センターを残した。だけども学生は学部からではなくて大学院から採ったんだよね。本当は学部からの方がいいんだけども、まあ組織上できなかつたんでしょうね。それで大学院からということになった。

高橋: 学生・大学とのつながりが大事だと。教授会でいろいろ議論されたということですが、主な

論点はどういうことだったんですか？

日江井: 主な論点はどのくらい人を東京大学に残すかとか、どこの観測所を残すかだとかね、東京大学を出てもやっぱり大学とは離れないようにしようではないかとかね。それは前向きな話だった。だけどもね、一人一人具体的な個人的な名前になるとさ、あの人をこっちに寄越せだとか、こっちがいいんじゃないとか、いろいろ議論が出てきますよね。

高橋: 観測所の中では木曽観測所が東大に残ったわけですよね。

日江井: 木曽観測所は残そうじゃないかと。それはハワイに作る望遠鏡の実験としてもね、1つは残さなきゃいかんと。ただ天文台と大学はどこが違うかというとね、技官なんだよね。天文台は技官が多い。技官っていうのは観測所をしっかり守ってくれる人なんです。岡山もそうだし、乗鞍も堂平も野辺山もそれから木曽もそうでした。だから僕ら天文台の人間はですね、技官というのを大事にしてた。でも技官の大事さというのはね、大学の先生にはわからないかもしれないと思われていたんですよね。つまり大学では自分の研究をすればいい。それに元々技官が少ないよね。せいぜい実験を手伝うだけくらい。

高橋: そうですね。今はさらに減っていると思いますが、実験系の研究室に少しいるだけですね。以前の先生のお話では、太陽物理部には30人以上もいたということでしたよね（第5回参照）。

日江井: だから望遠鏡をキープするのには技官が必要で、しかも技官に天文台で一生懸命働くという気持ちを持ってもらうことが大事なんです。例えば乗鞍でもそうだけね、雪崩の危険があつたりね、病気になつたりケガしたりする。それでも乗鞍のために働くよという気持ちをキープしてもらう。そのためには、技官が学会で発表するのを手伝う。私もそうだし平山（淳）君もそうだった。それに自分が学会で発表するときに技官の名前も出した。技官にしてみればね、自分の働いて

るところで取れたデータが天文学会で発表されるということはやっぱり嬉しいよね。

高橋: それでやり甲斐が感じられるわけですよね。

日江井: そしたらね、あるときに大学の先生から、「技官のために研究の時間を割くよりも、自分の研究をしろよ」と言われた。おっしゃる通りなんだよ。自分の研究をした方が本当はいいかもしれない。だけどそうすることによって技官の気持ちが萎えちゃうと困るわけだよね。だからそこらへんをね、大学の先生方はわかってるかどうか。大学が大きな装置を持つというのは大変ではないかと私は思うんだよな。

高橋: 確かに大学ではそういう意識は薄いかもしれません。

日江井: それでこの前、京都大学のせいめい望遠鏡ができましたね。京都大学でも天文台と同じように、そういう技官を大事にして望遠鏡を運用する組織ができてほしいなど私は思ったな。

高橋: 先生はすばるには特には関わってないですか？

日江井: 関わってない。すばるには関わってないけれども、天文の研究者の1人としてね、岡山の74インチの後に大きな望遠鏡が必要だと思ってましたよね。自分は太陽の研究者だから使わないにせよね、サポートしたいと思ってた。

高橋: 光天連（光学赤外線天文連絡会）でどこに作るかみたいことで結構激しく議論されていたようすけど、そういうのをご覧になっていてどうでした？

日江井: あのねえ、光天連ではずいぶんブレーンストーミングをやってたよね。どこに作るか、口径何メーターにしたらいいかと。それはいいことだろうと思うけどね、私から見るとね、それを実際に技官と一緒にになってやろうという人がどれだけいたのか。京都大学の飛驒天文台がありますね。あれを作ったときにはね、服部（昭）さんという腹の座った男がいたの。彼は早くに亡くなっ

ちゃいましたけどもね（1982年），そういう命を懸けて望遠鏡を作ろうという人間が見えなかつた，私には。だから東京天文台の中で小平君のグループができて、小平君はすばる望遠鏡のためにずいぶん時間を費やしたね。この前お話しした桜井（隆）君の場合もそうだけど、小平君も天文教室にいたらですね、もっと天文学のいい研究をしたんじゃないだろうかと思っております。だから望遠鏡を作るために議論するのはいいんだけど、本当に腹を括ってね、それに命をかけるような研究者がいればいいんですけどね。

●東京天文台/国立天文台の責務

高橋: 東京天文台が国立天文台に改組して、全体的にオープンになって風通しがよくなつたというふうにいろいろな方から聞いておりますが、日江井先生としてはいかがでしたでしょうか？

日江井: だからいろんな方が言っているように、東京天文台は保守的で閉鎖的だったんです。私自身も学生として天文教室に慣れていたんで、東京天文台に来たときにね、「業務連絡」という言葉を聞いてドキッとしたですね。業務？自分がやらなきやいけない業務があるのかなと思ってね。大学では業務連絡なんて聞いたことないよね。東京天文台では業務連絡が当たり前で行われていた。実際に私は三鷹や乗鞍でルーティン観測をしたわけね。一方、天文教室の方ではね、そのときは石田五郎さん、青木信仰さん、河鯨公昭さんの3人の助手がいてさ、自由に研究をやってるわけよ。だから天文教室っていうのはそういう点は自由でいいなど。

高橋: 東京天文台では自分の研究とは別にルーティン観測という業務があったわけですよね。

日江井: 私も初めはそのルーティンをやらなきやいけないというのが辛かった。三鷹ではルーティンの観測を午前と午後で1時間ずつ、6563（Å）の赤い光でフレアを観測するわけですよ。その間は空いてるから自分の研究をやる。それから乗鞍

へも行かなきやいけないでしょ。その研究を持って乗鞍へ行くとですね、1週間は観測の合間にその研究ができる。でも1週間経つとやっぱり3000メートルの山の上だから酸素が少ないせいか、頭がボーッとしてきてできなくなっちゃう。まあそういう生活だったわけよね。

高橋: そういう業務がいろいろな部署であるわけですか。

日江井: 天文台のヒストリーを見るとわかりますけど、そもそも天文台の責務として暦を作らなきやいけない、時を決めなきやいけないという国家事業があるわけ。研究もあるけれども、そういう業務もやらなければいけない。以前も少しお話しましたが、私が入る前、昭和16年のことなんだけども、非常に官僚的だった台長に反発して東京天文台から出ていった人たちがいました。服部さんだと清水彊さんだと、後で緯度観測所の所長になった奥田豊三さん。私の上司だった長澤進午さんも一度出ていて、後でまた乗鞍コロナ観測所に戻りましたけどね。それは彼らが助手くらいのときだったわけよ。そのときにみんなが広瀬（秀雄）先生にお前は残れよと言って、広瀬さんは残って結局後で台長になったけれども。だから昔から天文台の古さっていうのはあったわけよね。

その後、1946年に萩原雄祐先生が台長になって、それまでの部だとか課だとかそういうシステムじゃなくて、教育研究的なシステムにしようといつて教官制に移行したんです。でも全部整備するのにはほぼ20年かかったかな。

高橋: そんなですか。

日江井: それくらいゆっくりゆっくりシステムを変えていったんだね。だから私が入ったときにもまだ部課制で、太陽物理部には彩層コロナ研究課だとか、太陽面現象研究課だとかがあって、完全に教官システムではなかった。教授もいたけど、部長もいたし課長もいたし、もう混在してましたね。

高橋: 本当に部と課があったわけですね。お役



1989年8月29日、ハワイ・オアフ島ヌウアヌパリ展望台にて、左から小杉健郎氏、日江井氏、甲斐敬造氏、常田佐久氏（日江井氏提供）。

所って感じですね。

日江井: そうなんです。それで我々のときにもですね、私が助手で入ったとき、すぐに古在さんだと守山（史生）さんが檄文を出しました。もっと若者の意見を入れろ、研究時間を取りと。それでお前も賛同者として名前を連ねろって言われてね。みんなルーティン的な仕事をやらされてたから、それからの解放を願ってたわけよね。そのときはストライキもしなかったし、退職した人もいませんでしたけど、そういう古さを変えようという動きはありました。

高橋: まあでもルーティンな仕事も天文台の責務として、誰かがやらなきやいけない業務だったわけですよね。

日江井: そうなの。誰かがやらなきやいけない業務を我々は技官の人と一緒にやってやった。技官の人たちは天文の教育を必ずしも受けてないけれども、技術を持っていたり観測が上手だったりする方がいたんですね。乗鞍コロナ観測所なんかまさにそうだった。そういう技官の人が望遠鏡のメンテナンスをして、研究者もそれに付き合うわけよね。だからさっき言ったように大学では頭だけで考えて研究してよかったですけど、僕らは現業、現場を持ってた。体を張って、天文台の仕事をする。研究の時間をそちらに割かざるを得なかった

わけですよね。だからこそ岡山の望遠鏡もできたり、ハワイにも望遠鏡ができた。それはそういうバックグラウンドが東京天文台にあったからだと私は思ってるのね。

高橋: 国立天文台になると大学共同利用機関ですよね。そうするとますます役割が大きくなつたわけですね。

日江井: だからね、私が言いたいのはすばる望遠鏡が光天連という組織で議論されてたけれども、それを作ったり運用したりするために誰かが体を張って仕事をしなきゃいけないということをどれくらいの人がわかつてたかなあと。光天連だけじゃなくて天文学会でも同じような騒ぎがあつたんです。私はその話を守山さんから聞いたんだけども、当時、天文学会の幹部は東京天文台の人ばかりだって、地方、特に京都の方から文句が出たわけです。そのときに庶務の人が、天文学会にはこういうルーティン的な仕事があるって言ってね、名簿作りの仕事を京都の人に渡したんだそうです。でもいろいろ文句を言う人はそれをやらなくてですね、結局京都の太陽研究者の人がよくやってくれました。だからそういう体を使うという仕事が天文台には与えられていると僕らは思つたわけね。だからどうしてもねえ、考え方がコンサバティブになっちゃうわけだよね。

●東京天文台の事情

高橋: 東京天文台の時代は割と秘密主義というか、密室でいろいろ決めててみたいな感じのことを聞いておりますが、日江井先生としてはいかがでしょうか。先ほどの話を聞いていると、東京天文台には古い体制、保守的な考え方があったわけですが、大学と天文台ではだいぶ事情も違いますし、たぶん違う見方もあるんじやないかと思うのですが。

日江井: そうです、違う見方がある。

高橋: 日江井先生が東京天文台で助手になったのは1955年ですよね。だいぶ長いこと東京天文台、

そしてその後の国立天文台に勤めていたわけですが、先生が入ったころから振り返っていただきながらそのあたりの先生の見方をお話しいただけますか？

日江井: この機会ですので、歴代の台長がどんな方だったかお話ししておきましょうか。戦後すぐの台長が萩原先生で、その後が宮地（政司）先生ですよね。それから広瀬先生、古畠（正秋）さん、大沢（清輝）さん、末元（善三郎）さん。皆さんやっぱり東京天文台のいい伝統を受け継いでいました。天文学というのは物理学と違ってですね、やっぱりいわばこう浮世離れしているところがあるわけですよね。物理の人たちは随分進歩的で、大学紛争もやっぱり物理の方が進んでいました。そういう点では天文はどことなくノーブルというか、崇高なものを調べている、そういう風潮がありましたね。ただ、浮世離れしているけれどもノプレスオブリージュ（地位ある者が果たすべき道義的責任）っていう感じでですね、人々みんなを守る、東京天文台を和やかにするという感じで皆さん努力されていましたね。

萩原先生は厳しい先生だったんですが、先ほど言ったようにもっと天文台を進歩的にしようということですね、部課制から教官制に変えてきました。宮地先生は非常にコンサバティブでしたけども、しっかり天文台を守られたね。広瀬先生はもう大変優秀な方で、萩原先生も「俺は広瀬に良を付けた」とわざわざおっしゃったくらいにね、広瀬先生は天体力学ができたんですね。広瀬先生は論理的な先生でね、理屈をよくおっしゃってて、それで天文学史をよく知つたし、『シュミットカメラ』という本を書かれてましてね、当時、シュミット望遠鏡は皆さん垂涎的だったですね。それから古畠さん。古畠先生はおとなしい人ですね、東大を出た後にアメリカで研究をされてたんでアメリカ流でね、天文台をもっと柔らかくしようとしてた方ですね。

高橋: たぶんそのあたりの方々を直接知っている

人はもうあまりいないでしょうね。

日江井: そうでしょう。それから大沢先生です。大沢先生は非常にまじめな方で、自分の主義主張というのをしっかりと持っていた方です。大沢先生のとき、不幸なことに天文台で不祥事が起ったんです。それは乗鞍コロナ観測所に始まってるんですが、乗鞍ではいろんな業者との付き合いが多くなるわけですよね。事務のある方、非常に有能な方だったんですが、何かのお金をどうにかして訴えられてですね、天文台を辞めざるを得なかった。私は真相は知りませんけども、そういうことが起こりましたね。大沢先生は対応をきちんとやりになりましたけども、そういう事務官を出したということで、管理不行き届きということになった。その当時の乗鞍コロナ観測所長の守山さんもそうだったんですよ。でも大沢先生ほどまじめな人いなかたんじやないかと思いますね。それでまあ私の個人的なことでいえば、うちの親父が死んだときに、私はアメリカにいて葬式に出られなかったんですけど、大沢先生に出ていただいてね。その後で「お父さんは、君は人類のために仕事をしなさいと言って亡くなりました」と、そうおっしゃってくださいましたね。

高橋: すごいですね、人類のために、大沢さんの次が末元さんで太陽の方ですね。

日江井: はい、末元台長というのは非常にしっかりした人なんです。でね、末元台長のときに教授会で決めるようなことも密室で決めていた、なんて噂が立ったことがあるんですけど、決してそうではないんですね。いろんな人を台長室に呼んで、いろんな意見を聞くんです。私も呼ばれたことがある。それで、「日江井君、こうだよ」と言って手帳を見せられたことがあってね。誰のポストが何年に空く、誰が何年に定年っていうようなことが書いてあった。だから今のうちに今後の天文台、あるいは天文学会全体をどういう人をリードしてもらうのか、そういうのを考えなきゃいけないよ、と教えてくれたんだと思うんです

よ。末元さんは東大の天文学科卒業の人に限らず、学会で日本中の人の話を聞いて、あの人はいいなという人を呼ぶんです。当時は学会もシングルセッションで、誰が何をやってるかがわかる。私たち若い連中にも「彼はどういう人? あの分野はどうなってる?」って聞かれたりね、東大駒場とか京大とか名大とかからも誰を呼ぶか、よく考えていました。だから密室会議というより、先を見て次は誰にリードしてもらうか、その台長の考え方を私たちに伝えていたんだと思います。それはとてもよかったです。

高橋: そういうふうに末元さんが個人的に人を呼んでっていうのは、天文台の将来を考えるときの見方を教育するであるとか、将来について意見交換をするとかそういうことなんですか?

日江井: ダイレクトにはそう言いません。でも台長とはどういうものかということについて、だんだん教育していってくれたと言つたらいいでしょうね。

高橋: そこで何かを決めていたわけではないんですね?

日江井: 決めてたわけじゃないんですよね。教育をしてるわけなんです。でもまあ密室会議といえば密室会議なわけです。

高橋: 日江井先生も呼ばれたことがあったんですね。

日江井: そうです。呼ばれたことがありましたね。平山くんとか、守山さん、内田さんも呼ばれていた。他にもいろんな方が呼ばれていたようです。だから末元台長っていうのはこういうふうに将来を考えてるんだなあということがわかつた。ところがそれは外から見れば密室だと言われてね、そういうことで末元さんはコンサバティブで、古臭いじゃないかということをおっしゃる先生もいた。密室会議はダメだ、オープンで公明正大でなければならない。それはおっしゃる通り。でも漏らしてはいけない情報もあるんです。こういう組織ですから、外に出してはいけないような



1990年ごろ、国立天文台日江井氏の研究室にて（日江井氏提供）。

話もあったんですね。そういうこともあって、末元台長は個人的に人を呼んでいたんです。

高橋：大っぴらにはできないような話もあったと。

日江井：例えば教授会なんかでは特に人事の話は漏れでは困るんですよね。でもそれが実際漏れたことがあったんですよ。漏らす人にとってみればね、情報を出すのが当たり前ではないかと思っていたのかもしれません。一方、我々にとってみればこれは漏らしちゃいけないよというのがあった。漏らしていいものといけないものとの境が人によって違うわけですね。その人はここまでいいんだろうと。世の中が情報の時代になりつつあって、情報発信の上手い人が力を發揮する局面が増えたのも事実で、天文台も変わりました。振り返ると、末元さんにせよ私にせよ、どこまで情報を流し、どこからは慎重に、という考え方方は比較的保守的だったのかもしれません。今はだんだん、流していい範囲が広がってきましたよね。そ

ういう時代の変化の中で、天文台のやり方も変わっていました、そういうことだと思うんです。

高橋：国立天文台になったというのがそういう点でも大きく変わるきっかけだったのかもしれませんね。

●オーラルヒストリーについて

日江井：今までの天文月報のインタビューを見て、私もそうですけど年寄りというのは記憶があいまいということがありますよね。誤解ってこともあるわけですよ。記憶のいい方だって思い違いがあったりしてね。この記事はかなりの人が読んでいそうですか？

高橋：そうですね。連載を始めたときには、シニアの人には読んでもらえるかもしれないけど若い人は読まないだろうなあと思ってたんですね。でもやってみると意外と学生や若い方達も読んでるらしくて、学会などで声をかけてもらったりしますね。だからありがたいことに結構たくさん的人に読んでもらってるみたいです。ただその分、いろんな方から間違いを指摘されたりします。

日江井：クレームが来る（笑）。

高橋：僕の方で人名とか年号とかいろいろチェックはするし、編集部でもチェックしてくれるんですけど、やっぱりチェックできる内容とチェックしきれない内容があってですね。

日江井：難しいかもしれませんねえ。ただね、こういうふうに印刷されるとですね、将来に残っちゃうわけよ。だから間違いがあったときにどうするかだ。

高橋：いろいろな方からご指摘をいただいて、明らかな間違いは後で訂正を出しています。これまで人名などを間違ったことが何回かあったんですけど、そういうのは訂正文を出します。

日江井：そうですか、それは知らなかった。だからあなたも知らないことがたくさんあるから辛いわけですね。

高橋：それに、日江井先生の場合もそうですけ

ど、皆さんにしゃべってもらうときに何か資料を見ながら慎重にしゃべるわけじゃなくて、ざっくばらんにお話ししてもらう感じなんですね。だから生き生きとしたインタビューで面白くなるんですが、やっぱり人の名前とか出来事とか、重要なことでも間違ったり抜けちゃったりすることがあると思うんですよね。

日江井: でもさっきの天文台の話もそうだけど、見解の違いってのはどうしようもないよな。誰々はこう思ってた。私はこう思う。私だって偏ってるかもしれないからね。だからそういう当時の天文台の風をどうやって後世に残すかと。間違いを訂正するのはいいんだけども、この記事をリファーするときにね、なんとかさんがこう言ったからどうだこうだってリファーするのは非常に危険ではないかと思うんですよ。その人はそう思ったかもしれないけども、他の考え方もあるからね。いや、読むのはいいんだ。リファーするときには慎重にリファーしてほしいと思いますね。

高橋: 見方とか考え方みたいなものを正しい正しくないって判断するのはとても難しいですね。天文学もそうですけど、光だけで見てもわからない、電波だけでもわからない、いろんな波長で見て様々な側面から天体を理解しましょうということですね。台長だったり学長だったり、どんな人でも全てを知っているわけではないので、そういう意味ではどんな人の見方・考え方も偏っているわけですよ。だから同じ出来事でもいろいろな方の話を聞いて、様々な観点から見ることで全体像が見えてくると思うわけです。

日江井: だから誰かがこう言ったけど、別な見解もあるよというのがないといけないですね。

高橋: はい、それはまさに先ほどの東京天文台の改組の話で、これまで他の方々に聞いた限りでは東京天文台は閉鎖的だ、密室だという話が多かったわけですが、違う見方もあるというのを日江井先生から聞けたわけです。

日江井: だから私自身も偏っていたり誤解したり

しているかもしれないし、違う見解があるかもしれないから、リファーするときには慎重に扱ってくれということを1つ述べておきたいなと思うんですね。これは私だけじゃない。他の人たちの記事をリファーすることも含めてなんです。そんなことを私が言うのはおこがましいけどもね。特に人の名前出すっていうのは気をつけなきゃいかんなと思いますよね。他人事じゃないんだけどもさ。まあだからあなたの責任は重大ですよ。

高橋: はい、先ほど申し上げたように事実関係の明確な間違いがあれば修正するんですが、誤解や偏見の扱いは難しいんですね。ある状況においてある人がこういう誤解をしていた、というのはそれはそれでその時代と人物を表す重要な事実なのではないかと思っています。だから誤解も含めて証言として残したいのですが、かと言ってその誤解を読者がそのまま真実と受け止めてしまったら困るので、どのように扱うかが悩みどころなんですけども。

ともかくですね、天文の業界でこういうインタビューを系統的にやるのは初めてなので、まあ楽しく読んでもらう分には全く問題ないんですが、もし史料として使うとなったらどう使っていいかよくわからないと思うんですよね。天文コミュニティとして様々な人たちの証言を残していくこと自体は非常に重要だと思うので、どういうふうに残してどういうふうに利用していくべきかっていうのはちゃんと考えて行くべきだと思います。

日江井: 過去のことを残すんだったらね、天文台の75年誌だとか100年誌だとかね、そういう公式の史料もあるわけですよ。ところがこれも間違っていることがあるんだ。やっぱりねえ、歴史を残すってのは難しいね。史実を忠実に書くというのが非常に難しいということでしょうかねえ。

高橋: 歴史の訓練を受けた人であれば、こういうインタビュー記事に限らず1つの史料を丸ごと信用せずに、いろんな史料を比較して、この部分は信用できるとか信用できないとか検討すると思

うんですよね。だからそのように使ってもらえばいいと思っています。

日江井: このインタビューのように、いろんな人の見方とか感想とかを残すというのは面白いことだと思いますよね。あなたはいいことを計画されたなあとは思うけども、足を突っ込んでしまって大変だとも思うよ。私のようにいろいろ文句を言う人がいる。

高橋: いや、でも反響がある方が嬉しいです。誰にも何も言われないよりは、文句でも言われた方がいいです。

日江井: そりやそうだ。まあそうやって受け止めてやっていくわけだね。難しいけれども正確な歴史を残してほしいなと思いますのでね、どうぞよろしくお願ひします。

(第11回に続く)

A Long Interview with Prof. Eijiro Hiei [10]

Keitaro TAKAHASHI

*Faculty of Advanced Science and Technology,
Kumamoto University, 2-39-1 Kurokami,
Kumamoto 860-8555, Japan*

Abstract: This is the tenth article of the series of a long interview with Prof. Eijiro Hiei. In 1988, the Tokyo Astronomical Observatory was reorganized into the National Astronomical Observatory of Japan, becoming independent from the University of Tokyo. While, in this series, many people talked about the reorganization, here Prof. Hiei presents his account from his own perspective. As discussions unfolded about what kind of observatory to build under the new structure, Prof. Hiei recalls concerns that separating from the university might weaken ties with students, and that the importance of the technical staff who support observational instruments might not be readily understood on the university side. He also offers a different view on criticisms that the former Tokyo Astronomical Observatory was “closed” or “run behind closed doors,” pointing to the observatory’s particular historical background. Finally, he cautions that while oral histories like this interview are valuable as historical sources, they must be handled with care, since perspectives differ from person to person and can include misunderstandings.